

2016(仏暦2559)年 秋(10月)号 (第100号)

# 万行寺寺報

Mangyoji Jihō

発行  
浄土真宗本願寺派  
万行寺 山崎信充  
〒385-0003  
長野県佐久市下平尾461-1  
電話 0267-67-2460



## ■住職法話

お念仏の聲が伝えるもの

## ■～結ぶ絆から、広がるご縁へ～ ごえん

## ■本願寺の本

ありのままに、ひたむきに

## ■お知らせ、編集後記

## Photo

秋深まり、果物の季節です。写真の梨とは違いますが、先日、初めて佐渡の『おけさ梨』という梨を贈って頂きました。見た目ですら圧倒されるくらい、とにかく大きくて、家族3人で1個をやっと食べました。お裾分けしないと食べきれません。

# 住職 法話

## お念仏の声伝えるもの

他県から移住されてこられた、あるご門徒とのお話です。典てんれい礼社れいしゃからのご紹介を経て、

今年二月に、九十七歳で亡くなられたお母様のお葬式をお勤めさせていただきました。初めての縁ゆかりということもありまして、故人のこともご遺族の方々の様子もあまりよくわからないまま、通夜、葬儀とお勤めを終えたような印象でした。

ただ一つ印象に残ったことが、故人のご主人がお経の最中に、口癖のように「なんまんだぶ」と何度もお念仏を称えていたことでした。続く節目目のお勤めにもご自宅に伺わせていただくと、「なん

まんだぶ」とお勤めの間に常に称えておられました。

そのご主人も、後を追うように、この八月に百四歳にて亡くなられました。晩年はほとんど車いす生活で支えが必要でしたが、それまでの自分のことは自分でというしつかりした生活が百歳を越える人生を支えていたようです。

また、お念仏の生活との出会いにも興味がありました。が、聞けず仕舞じまいいになりました。ご実家の生まれ故郷で子どもの頃から培つちかったものか、それとも人生の中で大きな転機があったのかわかりませんが、何ものにも代えがたいお念仏との出会い話しを伺いた

かったものです。もっと早く出逢であえていたらと思うところです。

この度の、ご夫婦の葬儀を通して、喪主の息子さんは、お父様の称えるお念仏の大切さを身をもつて知らされたようでした。後世に、仏さまの教えを繋つなげていくのは、人や環境の問題も大事ですが、「なんまんだぶ」と称えるお念仏の声こそが広まって伝えられていくものであると気付かされた瞬間でした。

本山ですすめていた基幹きかん運動うんどうの時代に「念仏の声を世界に子や孫に」というスローガンがありまして。今の実践じっせん運動うんどうの目指す「つながる」「つ

たわる」というテーマにしても、先ずお念仏の声が基もとになつて伝わって実践じっせんされていくものだと感じます。

「なんまんだぶ」と称えるお念仏は、称える者を救わずにはおれないという阿あ弥み陀ださまの誓いです。手を合あわすことはしても、どうしても周まわりの目を気にして、称えることに抵抗を感じている方が多いようです。それでは「なんまんだぶ」と称えやすい念仏で届けて下さる阿あ弥み陀ださまの願いを、私自身が抑おさえてしまっているのではないでしようか。

お念仏のこころを味わっていきましよう。



「結ぶ絆から、  
広がる「縁へ」

# ぐんえん

お釈迦さまのさとりは、苦

しみの原因を、時間をさかのぼって観察することを得られた境地であり、もともと「縁起」は、時間的な経過の中で原因と結果の関係を意味していました。しかし、後の時代にになると、あらゆる存在は、他のものとの関係の中で存在しているという、相互の依存関係を意味するようにもなりました。つまり、「縁起」とは、私たちには見極めることが困難なものです。宇宙のあらゆるものは時間的にも、相互の関係としても、結びつき合って存在しているのであ

り、バラバラに存在しているようであっても、個別に単独で存在しているものはないという、この世界の真実のあり方を示す思想を表現する言葉になりました。

ですから、時間的なつながりと、互いの存在が同時的につながり合っているという二つの私たちの存在を規定するとともに、仏教徒として生きる道を明らかにする奥深い原理が、この短い「縁起」という言葉に集約されているのです。

とりわけ、日本に仏教が伝来して以来、この「縁起」の「お互いに関連し合う」という考え方が大切にされてきました。その「縁」に「二」をつけて「二縁」という表現になり、江戸時代には、浄土真宗の法話などでも、たびた

び用いられてきました。その後、「二縁」は、日本社会に広く浸透し、日常でしばしば用いられる言葉となり、「多くの縁によって生かされている」という見方が培われてきたとみられます。

親鸞聖人が「遠く宿縁を慶べ」と述べられるところにも、仏法に出あい、阿弥陀さまの教えに導かれる身となつたことを、遠い過去からのはかり知れない「二縁」によって与えられ導かれてきたとよるこはれているお姿、すなわち「縁起」の理念のもと、「二縁」をこよなくよるこは

れているお姿があらわれています。さらに、親鸞聖人は、阿弥陀さまの救いを「弘誓の強縁」と讃えられ「光明名号顕因縁」と、阿弥陀さまのは

たらきが、私たちの救いの「因」であり縁である」と示されました。私たちの救いのすべてが、他力であるとお示しになったのです。「ついで」

「編集・発行／浄土真宗本願寺派総合研究所、重点プロジェクト推進室」より

**第25代専如門主 伝灯奉告法要**  
The Commemoration on the Accession of the Jodo Shinshu Tradition to the 25th Monshu Sennyo

法要期日

2016(平成28)年

第1期 10月1日(土)～ 8日(土)  
第2期 10月20日(木)～ 27日(木)  
第3期 11月4日(金)～ 11日(金)  
第4期 11月18日(金)～ 25日(金)



2017(平成29)年

第5期 3月7日(火)～ 14日(火)  
第6期 3月28日(火)～ 4月4日(火)  
第7期 4月11日(火)～ 18日(火)  
第8期 4月25日(火)～ 5月2日(火)  
第9期 5月9日(火)～ 16日(火)  
第10期 5月24日(水)～ 31日(水)

浄土真宗本願寺派 龍谷山 本願寺  
TEL 075-371-3181(代) ホームページアドレス <http://www.hongwanji.or.jp>

## ～本願寺の本～

## ありのままに、ひたむきに

不安な今を生きる

おおたにこうじゆん

大谷光淳 著/PHP研究所 発行

定価 648円(税込)

おおたにこうじゆん もんしゆ

大谷光淳ご門主さま、初のご著書。

ほうとう けいしやう

もんしゆ

法統を継承した第25代門主が語る難しい時代を

生きるヒント！

本書では、心の不安や社会の矛盾に振り回される

ことなく、「ありのままに、ひたむきに生きていく」

という私の思いを語らせていただきました。強く

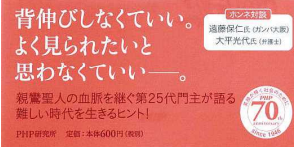
なくてもいい。力がなくてもいい。悩みは「生きるよりどころ」を見つけ出す糸口にもなります。

いま、さまざまな悩みを抱えておられるお一人おひとりにとって、この小さな本が、大きな喜びへのきっかけとなることを願ってやみません。(まえがきより)

[本願寺出版社HPより]

ありのままに、  
ひたむきに

不安な今を生きる

西本願寺 門主  
大谷 光淳

## お知らせ

今月は、毎年恒例の報恩講法要になります。お誘いあわせて、気軽にお参り下さいますようご案内します。

日時：2016（平成28）年10月30日（日）午後2時～4時

場所：万行寺（佐久市下平尾461-1）

## 編集後記

「ごえん」は、前号の続きでしたが、その「ご縁」そのものの成り立ちという、少し難しい内容だったかもしれませんが、大事なところです。またわかりやすく法話に取り入れられたらと思っています。◆ところで、本号で記念すべき百号を迎えることが出来ました。自らの研鑽のために、苦勞しながら毎月発行してきて、最近では、子育ても重なったため年四回の発行となりましたが、十年で百号のペースで本号を迎えることになりました。「おかげさま」と感謝するとともに、引き続きお寺から発信して参りますので宜しくお願ひ申し上げます。